

肉体改造エクスタシー —前編サンプル—

カタン——。上野朔^{うえのさく}は集合ポストのドアを開けた。

(ピザ屋さんに……新築マンション……ん?)

たくさん入っていたチラシ。一枚一枚目を通していくと、見慣れないチラシが目にとまった。薄いティーンシャツ姿の筋肉質な男性とダンベルの写真。どうやら近くにあるスポーツジムが新しい会員を求めているらしい。

(肉体改造かあ……)

一日体験無料の文字を見て、それだけを残して他は資源回収箱に入れた。

ピザも食べたいし、マンションだって買えるなら買っている。でも、どちらも先立つものがなければどうにもならない。

(スポーツジムもなあ……)

体は鍛えたいと思う。けれど、会員になるのは難しい。そう分かっているけど、つい憧れてしまっただけ。

ちよつと強く押し込むだけで折れそうなカギを回して部屋に入る。狭い玄関。二十五センチの靴を三足も置けばもう足の踏み場もない。

(お腹空いた……)

鍵をシューズボックスの上に置いて部屋に上がる。三メートルもない廊下を進めば、ベッドが部屋の半分を占めるワンルームだ。トートバックを下ろして床に座り、ベッドに寄りかかる。

(ええと……)

手にしたままのチラシを見る。そこには、

肉体改造エクスタシー!

自分を変えたいあなたを特別ご招待☆

パーソナルトレーナーがあなたをサポート!

男性だけでなく女性の視線も気になりません!

怖いほどの快感と共に体を鍛えてみませんか?

と、書かれていた。

(肉体改造エクスタシーって……)

最初の文言から思わず笑ってしまった。いかにもトレーニングを愛する男性向けの台詞。やはりジムは本格的に鍛えたいと思う人が行く場所なのだろう。

(別にお金かけなくて家で腹筋とか腕立てならできるしなあ……)

——この思考はよくないよな、と普段から思っていた。いいなと思うものがあってもデメリット

トや代替案に目を向けて「いいな」と思ったことさえなかったことにする。これではいつまでたっても楽しい人生なんて送れない——そう分かっているものの、これが現実だ。お金に余裕のない生活。楽しい人生なんて夢のまた夢。

(あーあ……)

体験日は三日間あるようだ。そのうちの最終日は掛け持ちしているアルバイト先のどちらも店休日。これは神様が普段頑張っているご褒美にと与えてくれたものなのかもしれない。

(なあんて……。もしご褒美をくれるなら宝くじ……。あーでも結局買うお金ないしなあ……)

一年前まではのんきな大学生だった。友達と遊び、アルバイトで月に数万円を稼ぐだけ。そのアルバイトだって同い年も多くて楽しくて、遊びのようなものだった。

今思えば、馬鹿だった。その頃にもっと働いて、遊びだけでなく貯金もしながら生活していれば今頃こんな貧乏な生活を送らないで済んだかもしれないのに。

両親は、一年前に突然死んだ。事故だった。幸いだったのは相手がいなかったことだろう。なぜかは分からないけれど、知り合いもない他県の山奥にある湖の中に車ごと沈んでいた。警察がタイヤ痕を調べたところ、落ちないようにと抗ったような形跡はあつたらしい。だから、事故。

(……はあ……)

両親に何があつたのかは分からない。しかし生命保険も解約済みで、通帳の残高もほとんどゼロになっていたことを考えると——。

(肉体改造エクスタシーかあ……)

脳筋なんて言われる人たちの中で必死に運動して汗を流せば、このぐだぐだした思考も一緒に流れていくのだろうか。ぼたりと床に落ちて、掃除員の目に留まるより先にモップが吸っていく——そんな風に、何もなかったようになるのだろうか。

(まあ、気分転換にはなるのかな……)

両親の死の一報を聞いてからのことはあまりよく覚えていない。でも、とにかく大変だった。両親が住んでいたアパートの退去、大学の退学手続き、そして、生計を立てられるような職探し。しかし大学は中退、車の免許も保証人もなしでは正社員になんてなれなかった。

今は学生時代からしていた飲食店のアルバイトの後に、もう一か所、別の飲食店で働いている。でも家賃や生活費で給与のほとんどは消えてしまう。家には寝に帰る程度なのに——それでも自分の居場所があるというのは大事なことだ。いっそのこと風呂なしトイレ共有のもっと安いアパートに引っ越そうかとも思ったけれど、今はまだ引っ越し費用に貯金を使う勇気が出なかった。(自分を変えたいあなた、かあ……)

お金はコツコツ貯めていくしかない。食費についてはバイト先のおかげでほとんどかからないので、あとはいかにひっそりと生活するかがポイントだ。夏や冬は休日でもだらだら寝ずに家を出る。そして適切な温度を保たれた図書館で過ごす。それで電気代も生命も守られる。でも、それも少し飽きてきたところだ。子供の頃から本を読むことは好きだったので苦痛に思うことはないけれど、それでもやはり、たまには他のことしてみたい。

(……一度行ってみようかなあ……)

こういうところは一体いくらくらいするのだろう。月額会員費というシステムなのだろうか。それとも行きたいときにフラッと行って、その日の分だけ払って使わせてもらうこともできるのだろうか。

普通、会員募集のチラシならそういうことも書いていそうなものだけけど、チラシを隅から隅まで読んでみても、お金のことは一切書いていなかった。高いから書けないのか、それとも一度体験すれば通いたくなると自信があるのか――。

行ったことがないので、ジムの経営戦略は分からない。でももしそれほど高くなかったら……今、貯金できているのはせいぜい月に二万円。ジムに通う余裕がないことは分かっている。でも今より体力が増えたら、もう一か所掛け持ちだってできるようになるかもしれない。その分が結局ジム費用になってしまったとしても、自分を変えることができる。趣味や目標もなく、ただ生きることしか考えない日々から抜け出して。

(……とりあえず無料みたいだし……)

予約制ではないようだから、当日行きたくなったら行けばいいと床にチラシを置いてシャワーに向かった。

(ここか……)

チラシを手に、大きなビルの前で足を止める。スポーツジムというのだからもつとそれっぽい建物だと思っていたのに、外観はただのオフィスビルだった。

(……間違っていない、よな……)

宗形ビル。チラシにも、ビルの入り口横にもそう書かれている。もう一度住所を確認してから中に入った。

「いらつしやいませ」

「あ、あの、」

チラシを見てきました——そう言うより先に、ジムの入り口に立っていた男性の視線が朔の手に移った。

「ご体験ですね。ご来店ありがとうございます。どうぞこちらへ」

男性の後をついていくと、待合室のような、休憩室のような部屋に入った。ゆったりと座れそうなソファが数脚に五台の自動販売機。飲み物だけでなく軽食やタオル、お風呂セットまで売られている。

そして、何も置かれていない壁の前には七人の男性がずらりと並んで立っていた。全員ががっしりとした体格で、白地に紺色のラインが入った揃いのジャージ姿だった。

(トレーナーさんかな)

全員が高身長で、精悍な顔つきをしていた。年齢は二十代後半から三十代半ばだろうか。でももしかしたら精悍さゆえに若く見えるだけの人もいるかもしれない。あまりじろじろ見ては失礼だと思いつつ、どうしても気になってちらちらと視線をやってしまう。

(すげえ……)

全員が驚くほどかっこよかった。体型が好みだからとか、そういう理由で鼻屑目に見ってしまったのかもしれないけれど、全員が魅力的。バランスの良い筋肉質な体系で、トレーニング雑誌に出てきそう。転んだときに支えてくれそう、なんて甘えた妄想をしてしまう。
(かっこいい……)

見ているだけで顔が赤くなってしまいそうで視線を外す。軽食の自販機にカップラーメンが置かれているけれどいいのかな、なんて無理矢理男性陣から意識を逸らしていると、横から声を掛けられた。

「こんにちは」

「あ、こ、こんにちは」

突然話しかけてきたのは、並んでいた男性のうちの一人だった。右から……三番目にいた人。その人だけが列から出て朔の前に立っていた。

「本日担当させていただきます、トレーナーの南みなみと申します」

「南、さん」

短髪犬顔。髪色が少し茶色く見えるのは染めているからだろうか——いや、どうやら色素が薄いらしい。目もどちらかという茶色がかっている。

「よろしくお願ひいたします」

「あ、はい、宜しくお願ひします。上野です」

「上野様ですね」

こちらにどうぞ、と言われて案内された先は狭い個室だった。狭いと言っても朔の住むワンルームよりも広い。そこに二人掛けのソファとテーブル、ウォーターサーバーが置かれている。

「どうぞお掛けください」

「ありがとうございます」

少し緊張してしまう。だって、こんなにかっこいい人と二人きりなんて——。

「では、こちらにご記入をお願いいたします」

渡されたクリップボードには一枚の紙が挟まれていた。一緒に渡されたペンを握り、項目を読んでいく。

(まずは名前と……)

あくまで無料体験だからか、住所や電話番号、生年月日を書く欄は見当たらなかった。ニックネーム可という気遣いのある欄に「上野朔」と本名を書き記す。

「……あ、あの」

「はい」

南はずっと正面に立っていた。それが礼儀や決まりなのかもしれないけれど、記入している間ずっと正面に立たれたままというのもなんだか気まずい。

「座ってください」

「——ありがとうございます」

すぐに返事がなかったのは、おそらくこの部屋にある座れる場所が、今朝が座っているこのソ

フアしかなかったからだろう。でも二人は座れそうな長い形なのだから座ればいい。

(少し緊張するけど……)

「失礼します」

南が左隣に腰を下ろすと、思ったよりもソファが狭いことに気が付いた。朔が小柄で、南が思ったより大柄だったのだ。それに重い——筋肉が多いからだろう、南が腰を下ろした途端、そこから側の座面が大きく沈み、朔の上半体が勝手にそちらに傾いてしまった。

(やばっ)

腹筋に力を入れて姿勢を整えたけれど、今度は太ももが触れてしまうのではないかと不安になった。ゲイであり、南を好みと感じる朔にとってはご褒美だけれど、ノンケであろう南には不快なはずだ。

「あ、あの……」

「はい、なんでしよう」

かなり親しい友人なら気にせずにいられる距離。しかし南とは初対面で、明らかにパーソナルスペースの侵害をしまっている。でも朔が席を立てば、南に嫌悪感を抱いたと勘違いさせてしまいそうで。

「……身長はもうずっと測ってないのでだいたいなんですがいいますか」

「後ほど測定を行いますので、体重の欄も空けておいていただいけません」

「あ、そうなんですわね」

意識を切り替えるために尋ねただけのつもりだったけれど、訊いてよかったなと思った。しかし、その次の欄を見て手が止まった。

「何度もすみません……このPサイズってなんですか」

「それはペニスです。そちらも後ほど測定いたしますので空白のまま結構です」

「……え？」

今、ペニスと——聞き間違いだろうか。身長体重が必要なのは分かるけれど、まさかペニスのサイズなんて。

「あの、すみません、えっと……？」

「ペニスです。男性器の」

「え、あの……」

しかも、それを測定すると言ったのか。

「あの、ここ、スポーツジム……ですよね？」

「はい。肉体改造エクスタシー……快感を得ながら効率よく体を鍛え上げる日本に唯一のスポーツジムです」

驚き過ぎて言葉が出なかった。肉体改造エクスタシーというのは、自分を追い詰めて楽しみつつ鍛え上げるということの比喻ではなかったのか。ぼかんとしていると、勧誘のタイミング得たりと思ったのか南が饒舌に話し出した。

「腹筋、背筋、腕立てにスクワット……家でもできるトレーニングはたくさんありますが、ジム

に通うことのメリットの一つは続けられることにあります。『会員費を払っているから』という気持ちで続けられる方もいらっしゃるんですが、『面倒臭い、飽きた、でも仕方ないからそろそろ行くか……』なんて気持ちでは体を動かしても爽やかな気分にはなれないでしょう。トレーニングはただ体を鍛えるだけでなく、ストレスの発散や自己肯定感を高めるためにも有効な運動なんです」

「は、はぁ……」

言いたいことはよく分かった。全て南の言う通りだと思う。しかし、だからといってそれがどうして快感に繋がるのだろうか。それにむしろ、ジムとしては会員費を払ってもらいながら利用率が低い方が儲けになるのではないのだろうか。

「私たちは、楽しく長く通っていただくことを理念としています。そのため、会員様の体型だけでなく生活習慣や性格、趣味趣向も把握した上でその方に合ったアドバイスを行っていくのです。そのためにジムにお越しいただいていない日でも連絡を取り、食事その他のお話をお聞きます」

「すごいですね……」

そこまで理解してもらえたら、飴と鞭を上手に使って分けてもらえそうだな。

「はい。ですが、そうやって付きっ切りでサポートできるかどうかは結局ご本人にやる気があるかどうか次第なのです」

「そうですね、連絡さえ来なかったら何もできないですね……」

ふと、自分がトレーナーの立場だったらどう思うだろうか、と考えた。自分が担当している人が突然来なくなる。そのままずっと来てもらえない、連絡も取れない——自分に非があったと考えるだろう。途中で飽きてしまう会員が多いことを知っていても悲しい気持ちになる気がする。そう思うと、先ほどの「来ない方が儲かる」というのは失礼な考えだった。

得にここではパーソナルトレーナーがその人にあつたトレーニングの内容を考えてくれるようだし、なおさらだ。一所懸命考えたそれが全て無駄になるなんてとても悲しい。

「はい。そこで、どうやったらストレスなく通っていただけるかを考えてつくったのが当ジムなんです。『そろそろ行っておくか』ではなく、今日も行きたい明日も行きたいと思っただけのようなジムをつくらうと」

感じる熱意。本当にこの仕事が好きなんだなあと感じられる。

(いいなあ……)

今の朔には、南のように仕事にやりがいや楽しさを感じる余裕は一つもなかった。とにかくただ毎日二つの仕事をこなすだけ。家においても疲労を溜めすぎないように、体調を崩さないように、寝坊しないようにと気を張って、財布の中身と睨めっこ。休日には夕方のタイムセールで安い食材を一週間分買って帰る。仕事が嫌いなわけではないけれど、とにかく仕事をミスなく終わらせることしか考えられていない。だから南が少しだけ羨ましく思えた。

「男性は——」

そこで南は言葉を切った。どうしたのだろうかと左を向くと、想像以上に近い場所に精悍な顔があつて驚く。咄嗟に平静を装ったけれど、驚いたことは伝わってしまっただろう。しかし南は体

を引くでもなく、逸らせなくなってしまった朔の目をじっと見ながら続けた。

「快感が好きでしょう」

~~~~~

「——朔くんは、射精した後ペニスをどうされていますか？」

「え？」

「濡れた部分を拭いて終わりですか？ それとも出したものをきちんと自分で舐めて清めていきますか？」

「え、え……あの、お風呂で流してます……」

そもそもオナニーをする場所がお風呂だ。ティッシュで拭くと亀頭にくっついてしまうし、もつたいない。それにお風呂なら息遣いが響いて、誰かと一緒にしていることを想像できるから。

「そうですか……では、流した後は？」

「え？ 普通に……体を洗ったりとかして……」

特別なことはしていない。仕事の後のシャワーの際に射精して終わる、それだけだ。

「分かりました。ではこれからは、きちんと労わってあげてください」

「労わる……？」

頷き、南が腰を上げた。どこかに行くのかと朔も腰を上げようと足に力を入れると、手で制される。

「そうです」

言いながら、南は朔の目の前に膝をついた。背が高いので、目の高さが同じになる。

「朔くんも、頑張ったときは『頑張ったね』『お疲れ様』と褒めてほしいと思うでしょう？」

「あ……」

思わず声が出たのは、凶星を突かれたからではない。単に、今南に褒められているような気持ちになっちゃったからだ。だって、言い方にすごく心がこもっていた。

「ペニスも一緒です。射精したら褒めてあげる、労わってあげる。そうして、たくさん射精できるように導いてあげるんです」

「導く……」

なんだか洗脳されているみたい。でも、南の声はスツと心に入ってくる。

「はい。ペニスに、頑張ったらもつと褒めてもらえるんだ、と覚えてもらってください。朔くんがペニスをちゃんと褒めて育て上げたら、きっと一日に三回以上の射精だってできるようになるですよ」

「あ……」

なんだか腰の辺りがむずむずする。普通、興奮するなら視覚や自発的な想像から始まることが多いのに、外から、なのに内部に向かって興奮を促されているみたい。

「いいですか？ 射精をしたら、ちゃんとペニスを褒めてあげるんですよ。言葉だけではなく、

撫でてあげるのもいいですね。そうやってたくさん愛情を伝えて……朔くんだって酷使されるだけではつらくなってしまうでしょう？ だから朔くん自身のことは私がたくさん褒めましょう」

「あ……南さん、が……？」

「はい。運動も、射精も、頑張ったらたくさん褒めます。トレーニングが終わったら体を流し、拭いて差し上げます。水分補給もして——ああ、ここではトレーニングが終わったら仮眠をとっていただくことができるんです。寝かしつけから起床までちゃんと私が付きっきりでおりますので」

「睡眠までするんですか」

「そこまで手厚いのなら月額二十万円も領けた。きっとみんな、休日には朝からここで楽しくトレーニングをして、シャワーでさっぱりして睡眠をとって、まるで心身をリセットしたような気持ちで帰っていくのだろう。」

「はい。睡眠だけを目的にお越しになられる方もいらっしやいます」

「すごい……」

シャワーも浴びられるし寝られるし……きつとここだと熟睡できるということだろう。聞けば聞くほど魅力的に感じてしまう。

「当然、最終的な目標は筋力を増やしていただくことなのですが、癒しの場としてもご利用いただけます。私どもも嬉しく思っております」

「なんだか溜息が出てしまった。なんて素敵な場所なのだろう。」

「さて……それでは、朔くんは一日一回、射精をされているということですね」

「あ、はいっ」

「そうだ、話を戻さなければ。領くと、南がまた隣に戻った。」

「オナニーの方法はいかがですか？」

「えっと……」

もう、回数もバレてしまったし——むしろ恥ずかしい発言は南の方がたくさんしているように思っていた。感覚がおかしくなっている自覚はあったけれど、普通とはなんだったか、すでによく分からなくなっていた。

「手でしてます。普通に」

「右手、ですね？」

「はい」

そう思ったのは右手でペンを持っていたからだろう。単純に利き手で扱く、というだけの話。

「分かりました。では最後に、SかMか……虐められるのと虐めるの、どちらがお好きですか」

「あ……どっち……かな……」

考えたこともなかった。恋人がいたこともないので、オナニーのときもそういう想像はしたことがない。

「お分かりになれませんか」

「はい……すみません」

「失礼ですが、今お付き合いされている方は？」

「いません。今までもいたことがなくて……」

そこまで言ってしまったら童貞だとバレてしまう。けれど、南相手なら何だって言えてしまうようになっていた。

「ではセックスのご経験は？」

「ないです」

「そうですか。ではペニスもアナルもまだ誰のことも知らないということですね」

「はい」

つい、普通に答えてしまった。異性愛者ならアナルという言葉に疑問を抱くはずなのに。

「承知いたしました。では……いかがいたしましたでしょうか。今日は完全に見学のみになりますか？それともせっかくですから体験されていきますか？」

「あ……えと……体験、してみてもいいですか？」

頑張ったら褒めてもらえる。そう思ったら体験したくなってしまった。でもどう頑張ったってこの会員費が払える気はしないので、そのままさようならになってしまう可能性もあるのだけだ。

「嬉しいです。今日は一緒に頑張らしましょうね」

~~~~~

「では、失礼します」

「えっ！」

ズボンを脱いで終わりだと思っていた。それなのに、南は素早い動き——止める間もないくらい——で下着を下げた。

「っ」

ぼろん、とペニスと陰囊が外に出た。恥ずかしくて、足首から下着を抜かれている間に両手で陰部を覆い隠す。

「では、お預かりいたします」

畳んだ衣類を持って、南は部屋の端に置かれたロッカーに向かった。衣類がその中に消え、代わりに大きな器具が取り出される。

「こちらにお乗りください」

それは学校によくあるような身長を測定する器具だった。懐かしい気持ちになりながら乗って背筋を伸ばす。

「身長が——えー、百六十四センチ……ですね。では続いてペニスの測定ですが……まだ緊張されておりますね。ペニスサイズは勃起時のサイズが必要ですので、先に腸内洗浄をして体重を測定いたしましょう」

「え、え？」

「機械で行いますので、寝転んでいるだけで終わります。その間にお体を拝見して、少しずつ体を高めて参りましょう」

「どうやら決定事項のようだった。今更やっぱり止めるとも言えず、言われるがままベッドに寝転がり横を向く。」

「軽く膝を抱え、お尻を突き出すようにしてください」

「恥ずかしい。けれど、南はこれが仕事なのだ。担当している会員みんなにしていることだし、その場数を考えれば医者に見せるのと変わらない。ただ、南が好みのタイプであるというところが引っ掛かるだけで。」

「はい、上手ですね。恥ずかしいでしょうに上手にできておりますよ」

「あ、ありがとうございます……」

本当に褒めてもらえるんだ、と何だか嬉しくなった。この調子で些細なことでも逐一褒められたら、きつともっと通いたくなってしまう。

「ではアナルを少しだけほぐします。うんちをするときのように少しだけいきんでみてください」

「はい……んっ」

「そうです、お上手です。アナルがぼつってり膨らみました」

「っ……」

なんてことを——咄嗟に体から力が抜けたけれど、そのときにはすでに何かが体内に入り込んでいた。

「はい、力を抜いてかまいませんよ。ふーとゆっくり息を吐きましょう。はい、ふー」

「ふー……」

南はふー、ふーとずっと呼吸を覚えてくれた。それに合わせてゆっくりと息を吐き、体から力を抜いていく。

「とてもお上手です。さあ、指が一本、根元までしっかり中に入りましたよ」

「ゆ、指?!」

「ああ、止めずにゆっくり息を吐いてくださいね、ふー」

「ふ、ふー……」

驚きで体に入ってしまった力を再び抜く。目を閉じて、ゆっくりゆっくり息を吐く。

「——はい。中の温度や様子もこうして確認いたします。便秘はされていないようですね」

「はい……」

まさか指だとは思っていなかった。今朝排便があったからよかったものの、もし便秘のときだったら……と思うと背筋が冷える。

「このまましばらく待ちましょう。アナルが指の太さになじんだらお腹の中をきれいにして、体重を測って……もしアナルの感覚で勃起できるようなら、先にペニスのサイズも測ってしまいましょう」

どう反応したらいいのか分からなかった。アナルで勃起なんてと頭では思いつつ、こうして南に体を見られ、褒められ、アナルに指を入れられていると思うと興奮してしまう。まだ勃起はし

ていけないけれど、ペニスはずっとむずむずしていて、今にも形を変えてしまいそうだった。

「……朔くん、息ですよ。ゆっくり息を吐きましょう。ふー……」

「ふー……」

息を吐き、体から力が抜ける度にアナルがひくつと収縮してしまう。まるで南の指の存在を感じ取ろうとしているみたいで恥ずかしい。

「そうですね、上手……ふー……ふー……ふー……」

「ふー……ふー……」

「いいですね、少しずつアナルが落ち着いてきましたよ。では指を抜きますので、そのまま……ふー……」

「ふー……」

指はゆっくりと抜けていった。何かがそこを抜ける感触というのは排便のときしか感じたことがないので、まるで南の前で漏らしてしまったような錯覚に陥る。

「うう……」

指と一緒に便まで出てしまっていないだろうか。いや、それもまずいけれど、南の指は確実に汚れてしまっているだろう——どうしよう。恥ずかしい。顔を見られたくない。

ぎゅつと丸まると、慰めるように南が背中を優しく撫でてくれた。

「頑張りましたね。あとは機械がしてくれますから大丈夫ですよ」

「うう……」

南は仕事、南は仕事、と頭の中で何度も何度も繰り返す。想像でしかないけれど、もし事故に遭って両手を骨折でもすればそのまま入院になって、看護師さんに下の世話をしてもらうことになるのだろう——それと同じ、それと同じ……。

「——大丈夫ですよ。とても上手にできていました。では次は腸内洗浄のホースを挿入しますので、またちょっとだけいきんでみてくださいね」

「うう……」

もうしたくなかった。でもしないと。南は仕事……もしこんなところで帰るなんて言ったら、きつと気分を害してしまうだろう。それに、恥ずかしいと思いつつもここで止めたいとは思えなかった。

(強引にしてくれたらいいのに……)

自ら行動を起こすのは恥ずかしい。多分、それを分かった上で全て言葉で指示してくれているのだろうけれど、もういつそのこと無理矢理突き刺してほしい。それで、南が勝手にやったのだと、自分に言い訳させてほしい。

「朔くん？ 大丈夫ですか？ お尻が痛いですか？」

「あ……いえ……んっ」

黙ってしまったせいで南を不安にさせてしまった。申し訳ない、と心の中で謝罪しながらお尻に力を入れる。

「はい、上手ですね。ちゃんとアナルが膨らみましたよ」

「っ……………」

また言われた。二度目なのに——さっきよりも羞恥と興奮が増してしまっている。

「ああ、戻ってしまいました。もう一度んーっとしてください」

「んーっ」

指を入れられたことで緩んだアナル。そこに力を入れて……………なことになるらどうしよう、と不安だったけれど、今度はいきんですぐに何か硬いものがアナルにあてられた。

「はい、入りますよ……………はい、上手。ではゆっくり体から力を抜いて、ふ……………」

「ふ……………」

ここまで来てしまえば本当に病院みたいだ。受けたことはないけれど、大腸検査とか、そういうもの。

「ふ……………ふ……………」

「ふ……………ふ……………」

数回呼吸を整えると、ホースがゆっくりと奥に向かって進んできた。

「っあ、」

「朔くん、ふ……………」

「ふ……………ふ……………ふ……………」

太い。どうやら最初は細く、それが徐々に太くなっていつているようだ。ホースが中に進むにつれて少しずつアナルが拵がり息苦しくなってくる。

「ふ……………そう、上手です……………ふ……………」

「ふ……………ふ……………ふ……………ふ……………」

もう頼れるのは南しかいなかった。必死に呼吸を合わせ、体から力を抜いていく。

「上手……………はい、そのままゆっくり息をしていてくださいね」

ホースの動きが止まった。カタン、カチャ、という軽い音が続き、それから今度は腰の辺りを撫でられた。

「では腸内洗浄を始めますね。温かいお湯が出て、それが吸引されて……………というのを数回繰り返します」

「はい……………」

「痛くないですよ。お腹が温かいなあって感じられると思います」

「はい……………」

不安だった。だって腸内にお湯を入れられて、しかもそれを吸引されるなんて。でも、南の「ふ……………」という声に意識を向けているだけで、いつの間に体からは勝手に力が抜けていく。

「そう、上手……………はい、では始めます」

カチ、という音が聞こえた。それから機械の低音が室内に響き、徐々にお腹の中が温かくなっ
ていく。

「あっ、あっ」

気持ちいい。お腹の奥が勝手にぼかぼかしていく。

「気持ちいいですね……たくさん気持ち良くなりましょうね」

「あっ……………」

南の手がお腹に触れた。そしてまるでお腹に自分の子供がいるかのように優しく撫でる。

「温かいですね……気持ちいいね……？」

「んっ、きもちっ……………」

抜けた敬語。それがまた快感を高めていく。まるで、南と親しい関係になったような錯覚に陥る。

「朔くん、ふー……………ふー……………」

「ふー……………」

「そう、いいこ……………上手ですね。ふー……………」

「ふー……………」

お腹を撫でる手と穏やかな声に浸っていると、お腹の中からゆっくりと温かみが消えていくのが分かった。

「あっ……………」

そして、重みも消えていく。

「あっ、あっ」

「大丈夫……今お腹の中をきれいにしていますからね……またすぐ温かいのが入ってきますよ」
子供に言い聞かせるような話し方だった。まるで可愛がられているみたいでお腹だけでなく胸まで温かくなっていく。

「あっ……………きもち……………」

「朔くんはお腹の中が温かいのが好きなんですね」

「んっ……………、そうみたい、です」

でも、なんだかさつきよりお腹が重く、苦しい。

「少しずつお湯が増えていきますよ……大丈夫、痛くない……痛くない……ふー……………」

「ふー……………」

もう完全に南のペースになっていた。さつき初めて会ったばかりとは思えないほど信用しきってしまっている。

「そう、上手……………はい、では一度お腹を空っぽにしましょうね」

「あっ……………」

お腹が軽くなっていく。寂しい――。

「やあ……………」

「ん？ 可愛い……………お湯を取られちゃうのが嫌ですか」

「っ……………」

つい子供のような声を出してしまった。もう大人なのに恥ずかしい。

「すみません……………大丈夫です」

「ダメですよ。感じたことは全てちゃんと教えてください。お腹のお湯がなくなってしまふのは寂しいですか？」

南にはなぜか、逆らえない空気があった。言うことを聞きたい。そして、ちゃんとできたら褒めて欲しい——。

~~~~~

「最初にご案内するのはストレッチルームです。支度を終えられたらまずこの部屋で体をしっかりと伸ばして準備体操をしていただきます」

説明を受けながら廊下を進み、開けてもらった部屋に入ると、目の前に広がった世界に驚いた。(わ…………！)

南の言う通り、本当に裸の人がたくさんいたのだ。けれど全員がそうというわけではない。裸の人は必ず誰かと一緒にいて、その相手は全員ジャージを着ていた。南と同じデザインの人も、別のデザインの人もいる。おそらく同じデザインはトレーナー、別のデザインはSコースや特別コースの人なのだろう。

「どうぞ」

「し、失礼します…………」

部屋の広さはテニスコート程だろうか。手足を大きく伸ばす場所だと思おうと狭いような気もするけれど、広すぎないせいか全体を見渡すことができる。

「こちらに」

導かれるまま空いたスペースに移動すると、南はマットを取ってくると言って部屋の奥にある戸棚に向かって歩いて行った。その間、つい気になって室内を見回してしまう。

(すごい…………)

あまり人のことをじろじろ見てはいけないと分かっているのに、どうにも目を逸らすことができなかった。だって、若い男性がたくさん裸でストレッチをしているのだ。

「もつと…………もう少しペニスを見せつけてみましょうか」

「やあんっ！」

すぐ隣から聞こえた声。視線を向けると、二十歳くらいの男の子が全裸で大きく足を広げている。その後ろにはトレーナーがいて、男の子に声を掛けている。

「もつと…………そう、もつとおちんちんを見てって言いながらしてみましよう」

「ああんっ！ おちんちん見てえっ！」

思わず…………本当に無意識で見ってしまった。

(わ…………！)

見せつけるように開かれた足。その根元には、びよこんと勃起したペニスがあった。

「はい、ではゆっくり息を吐いて…………ふ…………ふ…………」

「ふ…………」

「そう、いいですよー。おちんちんちゃんとも見てもらえていますよ」

「えっ!」

「あっ!」

トレーナーはこちらを見ていなかったはずなのに、どうやら朔の視線に気付いていたらしい。逃げるように顔を背けると、その先にはまた別の男の子がトレーナーと共にストレッチを行っていた。

「んっ……」

「息を止めてはいけませんよー……ふー……」

こちらでは、大きく足を広げた状態で上体を前に倒していた。しかし、なぜか太ももの間には小さな台が置かれ、男の子の背後に膝をついたトレーナーが男の子を後ろから抱きしめるようにして台の上に手の甲をのせている。

「ふー……」

「そう上手……もう少し……」

「ん……ふー……っあ!」

男の子が苦しそうにしながらも体を前にぐっと倒した。そのとき、どうやらトレーナーの手に男の子の胸が触れたらしい。男の子が嬉しそうな声を上げた。

「あんっ! あっ」

「こら。おっぱいを擦りつけてはいけませんよ」

「やあんっ!」

ダメだと言われているのに、男の子はもじもじと体を揺らした。会話を聞きさえしなければ、トレーナーが上体の角度を調整しているだけと思えたのに——また目が離せなくなってしまった。

「あんっ、あっ、せんせえ……! おっぱいくりくりしてえ!」

「ダメですよ。今はストレッチです。股関節を柔らかくしないとつまで経っても見せつけセックスができるようになりますよ」

「やだあっ!」

——見せつけセックスとは何だろう。でも、なんとなく分からないでもない。

(すごいえっち……)

もう、その言葉しか浮かんでこない。だって、こんないやらしいストレッチがあるなんて。

「——朔くん、そろそろ朔くんもストレッチを始めましょうか」

「っ?!」

突然の声に振り向くと、すでに床にはマットが敷かれていた。

「ほら、もう裸なんて気にならなくなったでしょう」

「あ……」

そういえば、自分も今いやらしい恰好をしているのに、見るのに夢中ですっかり忘れてしまっていた。

「さあ、朔くんもえっちで気持ちいいストレッチをしましょうね」

座るように言われ、マットにペタリと腰を下ろした。すると、まずは身体の硬さの確認をすると言われた。真つすぐ足を伸ばしたまま、ぐーっと手をつま先に向ける……が、掠りもしないところで止まってしまった。

「硬いですね……」

「すみません……」

「いえ、日頃からしていないと体はどんどん硬くなってしまいますからね。これからは毎日ご自宅でも五分ほどストレッチを行ってください」

「はい」

かなり——普通ではないジムだと思っていたけれど、どうやらアドバイスについては一般的なようだ。痛みを感じない程度にゆっくり伸ばすようにという言葉に頷きながら体をほぐす。

「伸ばしているときはゆっくり息を吐いてください。腸内洗浄をしたときのように」

「なんつ……」

こんなところでそんなことを——しかしそんな焦りの理由だってお見通しのようなだった。

「みなさん同じですよ」

「え？」

「裸でストレッチをしている方はみなさん腸内洗浄を済まされてからここに来られていますのよ」

「そうなんですか？」

「はい。ストレッチが終わりましたらこのままトレーニングルームに移動しますので、特別な事情がない限り、準備を全て終わらせてからのスタートになります」

「……」

つい、「分かりました」と言ってしまったそうになった。けれど到底正規会員になてなれないし、無料会員になったところで二十万円分の手伝いができるとも思えない。となると、今日が最初で最後ののだからこのシステムを覚える必要はないし、覚える気があると思われると、南に無駄な期待をさせてしまう気がした——丁寧に案内してくれる南には本当に申し訳ないけれど。(……営業ノルマとかあるのかな……)

もしそうなら本当に時間の無駄になってしまう。けれど、もうその話は何度も繰り返した後ののだ。これ以上言うのはしつこいだろう。

「さあ朔くん、ゆっくり息を吐きながら体を伸ばしていきましょう。ピンクの可愛い下着をたくさんの人に見てもらいましょうね」

「っ……あっ……」

南の言葉のチョイス。そして周りから聞こえてくるいやらしい言葉。ダメなのに、ペニスが勃起を始めてしまう。

「ペニスも体を伸ばし始めましたね」

まるで今日はいいい天気ですねとても言うような口調でそんなことを言われ、顔が爆発したように熱くなった。しかし、周りを見ても朔を見ている人は一人もいない。

「大丈夫ですよ。みなさんえっちな気持ちで他人を気にする余裕はありませんから。朔くんも早く周囲の目が気にならないほどえっちな気分に入り込めるようになりましょうね」

それに頷くべきかは分からなかったけれど、無視するわけにもいかなくて。でももし……もしここに通えるような財力があつたら、きっと素直に頷いていただろうと思う。

「恥ずかしいです……」

無難な返事。しかし、南は「大丈夫ですよ」と言った。「朔くんならちゃんとたくさん気持ち良くなれますよ」と。

「気持ち良く、ですか」

「はい。ストレッチ自体も体が伸びる気持ち良さはありますが、裸で、恥ずかしいところを人に見てもらいながら過ごすという快感を覚えられれば、人の視線だけで射精だってできるようになります」

「や、え、嘘……」

見られているだけで射精なんてできるはずがない。しかしトレーナーの南が言うのなら——いやでもまさか、そんなことって。

「できますよ。まだ信じられないかもしれませんが、見られている興奮だけで射精できる人もいます。当然誰にでもできることではありませんが、朔くんはそれができるようになる方だと、私は思っています」

(僕が……?)

どうして南はそんな風に思うのだろう。まだ会ったばかりで何も知らないというのに。

「……さあ、もう一度足を——」

おしゃべりによって中断されていたストレッチの再開を促されたとき、視界の端でドアが開いたのが分かった。つい、なんとなくそちらに目を向けてしまう。

(あれ?)

入ってきたのはジャージ姿の男性だった。体格もいのでトレーナーの一人だろうかと思ったけれど、南たちが着ているのとはデザインも色も違う。

(お客さん……?)

「あの、」

視線だけで問うと、南は小さな声で教えてくれた。

「ああ、あちらはSコースのお客様です」

男性はきよろきよろと室内を見回していた。どうやら誰かを探しているらしい。そして目当ての相手を見つけたようで、嬉しそうに顔をほころばせながら朔の方に歩いてくる。

(え……?)

まさか知り合いじゃないよな? と不安に思っていると、どうやら朔の隣で開脚している男の子が目的だったらしい。目の前に膝をつき、優しい笑顔で声を掛けた。

「タツくん、お疲れ様」

「あっ、小久保さん！」

タツくんと呼ばれた男の子も嬉しそうだった。恋人同士なのだろうか。

「タツくんの小さなおちんちん、遠くからでもすぐに分かったよ」

「やだぁ……」

全然嫌と思っていない声。けれど、その声は不快感を覚えるどころか可愛らしく聞こえる。

「でもみんなに見てほしいから、おちんちんを出したまま大きく足を広げているんでしょ？」

「違うもん、ストレッチだもん……」

ずいぶん幼い話し方だ。でも嫌味じゃない可愛さがある。小久保と呼ばれた男性も嬉しそうだ。きつと可愛くて仕方がないのだろう。

「ほら、もうちょつと頑張つて足を広げてみようか。もっとよく見せて」

「んっ、見てくれる？」

「もちろん。そのために来たんだよ」

「ん、嬉しい……見て、小久保さん、僕のおちんちん見てっ！」

つい、朔までそちらを見てしまった。けれどタツも小久保も、朔の視線には気付いていない。

「よし、上手におちんちん見せつけられたね。もうブリッジはした？」

「いえ、まだこれからでございます」

小久保の疑問に答えたのは、タツに付いているトレーナーだった。その返事に小久保は満足げに頷き、タツのペニスを一撫でして言う。

「タツくん、次はブリッジが見たいな。今よりもっとたくさんおちんちんを見せてみて」

「あっ……でも……」

「ん？」

「あの……」

「ああ、よしよしと。ペロペロどっちがいいか、かな？」

「は、はいっ」

よしよしと。ペロペロとは一体何だろう。ペロペロは舐めるという意味だろうと分かるけれど、よしよしは何なのかは分からない。

「タツくんはどっちがいい？」

「……どっちも……」

小久保の問いに、真っ赤に染まるタツの頬。どうやらすごく素直な子ようだ。

「よし、じゃあどっちもしようね。先によしよしにしようかな」

小久保が言うと、タツは少しだけほつとしたように頷いた。そしてマットに寝そべり、足を肩幅に開いて膝を立てる。

(えっちな……)

全裸なので、もうそれだけでとてもいやらしい。勝手に視線が中心に集中してしまう。

「ん……小久保さん、お願いします」

「ああ、ちゃんと触れられるように頑張るんだよ」

「んっ……」

「タツが苦しそうな声を上げながら腰を上げた。けれど体が硬いのか、なかなか思うように上がっていかない。」

「頑張っ。もう少し」

「は、いっ」

「だいぶ苦しそうだ。そういえば、自分もブリッジなんて最後にしたのは一体いつだったんだろうと考える。もしかしたら朔はもうタツほど体を持ち上げることはできないかもしれない。」

「頑張れタツくん」

「んっ、あっ……」

「タツがじりじりと手のひらと足裏を移動させていくと、少しずつ上がってくる。ペニスに向かって小久保が手のひらを伸ばした。しかし触れはせず、少しだけ距離を置いて止めてしまう。」

「もう少し——」

「あ、あっ、ああっ！」

~~~~~

「トレーニングルームは、廊下を挟んで正面にあった。ストレッチルームの二倍はありそうな広い室内には、ジムらしく、いろんな器具が置かれていた。しかし普通のジムではありえないほどの嬌声が響いている。」

(すごい熱気……)

「あんっ、あっ、あっ、ああっ！」

「もう少し……あと三十秒……」

「やあっ！ もお無理いっ……！」

「……はい、ではもう一度最初から」

「やあ……」

「いやらしい声。「嫌」と言う声があちこちから聞こえるけれど、どの声も本当に嫌がっているようには聞こえない。」

「朔くん、どうぞ中へ。トレーニングについてご説明いたします」

「あ、は、はい……」

「とてもいやらしい空気。もしフェロモンが見えたら、きっと室内は濃いピンク色に覆われて見えなくなっていたことだろう。」

「では手前から——」

「南について行くと、最初のコーナーには一面にプレイマットが敷かれていた。そして一番手前のところには全裸の男の子が三人、M字開脚で陰部を露出しこちらを見ていた。」

「南さん！ お疲れ様です」

「お疲れ様です」

「南と男の子が挨拶を交わす。南は慣れているのか普通だけれど、つい陰部を意識して——自分

もほとんど同じ格好なのも忘れて——目のやり場に困ってしまふ。

「今日は体験なんです。お邪魔しますね」

「はい。こんにちは」

「あ、こ、こんにちは」

恥ずかしくないのだろうか。男の子は見られ慣れているのか、照れた様子は微塵も見られない。自ら膝裏に手を添え、大きく開いている。

「朔くん、ここは胸筋と上腕二頭筋を鍛えるスペースです」

南の視線を追ってマットコーナー全体を見回すと、二人もしくは三人組の男性たちが点在していた。

「Mコース以外のお客様はここでのペニスを使うかを選び、中に入ります」

「え、え？」

理解が追いつかなかった——でも、先ほどのストレッチを思い返せばおかしいことはでない……けれど。

「ああ、お一人来られましたね」

背後から男性が近付いてきたことに気付いた南がさつと体をわきに避けた。それに倣い、朔も場所を空ける。

「あ、南さんじゃないですか。おはようございます」

「おはようございます。トレーニングは順調ですか」

どうやら知り合いらしい。さりげなく下着を手で隠し、黙ったまま会話を見守る。

「ええ。ここに来るようになってから毎日が楽しくて。今日は見学の付き添いですか」

「はい。一日体験なんです」

そりゃあいい、と男性は朔を見て微笑んだ。

「きつとここが好きになるよ」

「は、はい……」

まだ何も分かっていない。でも、確かに男性の言うとおり、ここは素敵な場所だということだけは気付いている。

「今日はどこの子にしようかな……」

男性は早速ペニスを選び始めた。足を開く男の子の前に膝をつき、吟味し始める。

「ああ、君は匂いを嗅がれるのが好きなの？」

「はい……スンスンされるとそれだけで勃起してしまいます」

何の話をしているのだろう——邪魔にならないよう横から覗き込むと、どうやら男の子は全員首からボードを下げているようだ。さつきはつい陰部に目がいってしまい、その後すぐに逸らしてしまつたので気付かなかった。

「ボードには特長が書かれています」

朔の視線に気付いたのか、南が解説をしてくれた。

「名前とペニスサイズ、射精までの時間、最終射精の日いち、潮吹き経験の有無と、ペニスの呼

称です」

「呼称？」

「はい。その子が感じる呼び方のことです。おちんちんと言われたいや、クリトリスと言われたいやなど、いろんな子がいますので」

(わわわ……)

すごい世界だ。でも今来た男性も、選ばれるのを待っている子もみんな楽しそうに見える。

「おや？」

男性が一番左に座っていた子に声をかけた。

「君はお潮の経験がないのか」

「はい……」

「興味は？」

「あるんですが、出なくて……」

「そう。じゃあおじさんと今日は練習をしてみようか」

「どうやらその子に決めたらしい。嬉しそうに頷く男の子の手を優しく引いて、奥の棚に歩いてく。」

「ここでペニスを決めたら、次は奥の棚で使うオナホールを選びます」

ここでのトレーニング方法がようやく分かった。オナホールを動かす動作で腕や胸を鍛えるということだろう——すんなりと理解してしまう自分が怖い。でも、そうとしか考えられなかったし、ここなら十分に有り得た。むしろもう、普通のトレーニング器具を使うと言われた方が驚いてしまうかもしれない。

男性たちを追うように歩き始めた南について行くと、棚には驚くほどの種類のオナホールが並んでいた。

「見た目や内部構造の違いの他に、大きさや重さもそれぞれ違うものを用意しています。一番軽いのは三百グラム。こちらはMコースの小柄な子がよく使います。対して一番重いのは五キロ。ペニスにはめているときに手が離れると大怪我に繋がりますので、こちらはトレーナー付き添いるときにしか使用できません」

中編・後編と続きます！

基本的にはずーっとこんな感じのエロです。

全編におけるタグ

腸内洗浄・視姦、オナニー、オナホール、強制絶頂、焦らし、羞恥、潮吹き、言葉責め・おむつ・サーバー飲尿・ディルドスクワット・精液吸引・性交仕・亀頭責め・失禁・視姦・焦らし・射精管理

肉体改造エクスタシー —前編サンプル—

goneone (ごーわんわん)

2020/12/12

✉: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv : 19591291

Twitter: @gooneone11

📷📷📷: gooneone

